

土木遺産保存運動後の市民活動の促進 ― 日南市堀川運河周辺における油津地域協議会による 回遊プログラムの試行報告 ―

倉岡宏宜¹・永村景子²・谷越衣久子³・辻喜彦⁴・高尾忠志⁵

¹非会員 日南市役所水道課施設計画係（〒887-8585 宮崎県日南市中央通一丁目1番地1 水道庁舎）
E-mail: h-kuraoka_ni@city-nichinan.jp

²正会員 九州大学大学院 工学研究院 特任助教（〒819-0395 福岡市西区元岡）

³非会員 日南海岸地域シーニックバイウェイ推進協議会事務局（〒880-0014 宮崎市鶴島2丁目10番25号）

⁴正会員 合同会社アトリエT-Plus建築・地域計画工房 代表社員（〒201-016 東京都狹江市駒井町3-37-14）

⁵正会員 博士(工学) 九州大学持続可能な社会のための決断科学センター（〒819-0395 福岡市西区元岡）

宮崎県日南市油津は、中世から日明貿易や琉球との貿易で栄えた港町である。堀川運河は、油津港まで舢舨の運搬を効率的に行うため、江戸時代前期に整備された。昭和60年代には一度、運河の埋め立てが計画されたものの、市民の保存運動により保存、再整備が実施され、堀川運河は国内で初めて国有形文化財に登録されている。この保存・再整備事業が最も活発であった時期から既に10年程度が経過し、油津地域におけるまちづくりの形態は、運河沿いのハード整備を中心とした取り組みから、まちの賑わい創出に向けた取り組みへと変化を遂げている。本稿はこうした時期に直面した油津地域で、地域協議会と行政によりまちづくりの新たな展開を目論んだ回遊プログラム「へえほおまちあるき」の試行的な取り組みを報告するものである。

Key Words : Civil Engineering Heritage, civic activity, Aburatsu, Horikawa canal

1. はじめに

宮崎県日南市油津の堀川運河(写真-1)は、昭和60年代には一度、運河の埋め立てが計画されたものの、市民の保存運動により保存され、再整備が実施された。なお堀川運河は国内で初めて国有形文化財に登録されている。この保存・再整備事業が最も活発であった時期から既に10年程度が経過し、油津地域におけるまちづくりの形態は、運河沿いのハード整備を中心とした取り組みから、中心市街地活性化事業を契機とした、まちの賑わい創出



写真-1 再整備された現在の堀川運河

に向けた取り組みへと変化を遂げている。本稿はこうした時期に直面した油津地域で、地域協議会と行政によりまちづくりの新たな展開を目論んだ回遊プログラム「へえほおまちあるき」の試行的な取り組みを報告するものである。

2. 堀川運河と油津まちづくりの歴史

油津は、中世から日明貿易や琉球との貿易で栄えた港町である。堀川運河は江戸時代前期、油津港まで舢舨の運搬を効率的に行うために整備された。明治時代後期からは、舢舨は堀川運河沿いを集積場として西日本や中国大陆まで輸出された。また大正から昭和初期には、舢舨景気とマグロ景気により、油津は賑わいの最盛期を迎えた。

1975(昭和50)年に堀川運河は埋め立てられることが決定したものの、1988(昭和63)年に「堀川運河を考える会」が保存運動を開始して以来、1991(平成3)年の「日南市堀川シンポジウム」の開催や宮崎日日新聞による

「日南堀川物語」の連載、1992(平成 4)年「男はつらいよ 寅次郎の青春」ロケ、1993(平成 5)年には「日南市産業活性化協議会(NIC21・異業種交流団体)」により「油津―海と光と風と」が刊行されるなど、油津と堀川運河の素晴らしさが市民に再認識されるようになった。油津地区住民を中心とした油津みなと街づくり委員会では、1996(平成 8)年に油津再生の具体的な計画である「蘇れ油津 港と運河の街づくり計画」を立案した。この中で油津再生の中核施設として位置付けられていた油津赤レンガ館が市民 31 人により買取り保存されるなど、油津地区住民の市民活動は非常に活発であった。

1993(平成 5)年に開始された堀川運河の整備工事は、市民による保存運動や市の方針、専門家の提言などを経て、石積護岸の修復や周辺の修景が行われる運びとなった。こうした運河周辺の一体的な整備を総合的に議論・調整するために設立された、油津地区・都市デザイン会議は、2003(平成 15)年から 2014(平成 26)年までに全 16 回開催された。堀川運河を軸とした施設整備が概ね落ち着いた 2012(平成 24)年、日南市では中心市街地活性化基本計画が内閣総理大臣認定を受け、油津まちづくり会議を設置、本格的な中心市街地活性化事業が始まった。この時期から、油津のまちづくりは施設整備中心の取組みからまちの賑わいを取り戻す取組みへと形を変えた。

次章以降に紹介する一連の取組みは、日南市中心市街地活性化事業を契機として取組んでいるものである。

3. 日南市中心市街地活性化事業における水辺利活用の検討

先述のとおり、日南市は「日南市中心市街地活性化基本計画(計画期間平成 24 年 12 月～平成 29 年 3 月)」を策定し、油津地区を対象とした中心市街地の活性化に向けた 48 の事業を展開している。この中心市街地活性化事業を日南市における「新しいまちづくり」のモデル的取組みとして推し進めるため、行政や市民、地域外の応援団や専門家など関係者が一堂に会して議論する「油津まちづくり会議」や、各プロジェクト間の調整を行う「油津まちづくり会議ワーキング」などが設置され、まちづくりが一体的に推進されている。油津まちづくり会議が示す「油津まちづくり行動計画(案)」では、中心市街地活性化事業において「商店街再生」「観光振興」「世代交代」の 3 つの課題に取り組むことが示されている。

当行動計画(案)では、堀川運河や油津港といった歴史資源を守り続けてきたことを油津地区の強みとして明示している。これらを軸とした地域文化の継承と観光推進は、中心市街地活性化事業で取り組む 3 テーマの 1 つに掲げられ、「水辺利活用社会実験」はこのテーマの具体的な取組みに位置付けられている。夢ひろばリニューア

ルや赤レンガ館活用といった既存施設の整備・利活用に加え、堀川運河・油津港の水辺空間利活用を促進するような取組みが重視されている。

さらに地域文化の継承には、これまで油津の歴史資源を守ってきた地区住民の主体的かつ持続的な取組みが不可欠といえる。また堀川運河を軸とした施設整備がひと段落し、歴史資源の保存運動を契機とした市民活動も、昨今は一時期に比べ落ち着いている。ややもすればマンネリ気味の地域において、堀川運河周辺の水辺空間を十分に活かしているとは言いがたいのが現状である。一方で油津地区は人口減少・少子高齢化が著しく進展しており、地域に蓄積してきた歴史・文化・生活・営みといった「地域の記憶」が、徐々に失われつつある。こうした状況に歯止めをかけるには、市民活動を再び活発化するとともに、新たな人材・世代の参画を促し持続可能な取組みへと発展しうる、何らかの仕掛けを要する。

以上より、水辺利活用社会実験は下記に留意して複数の実験を実施することとした。

- 「キャスト(誰が)」と「プログラム(どうやって)」が重要であることから、活動を担う「人材」と効果的な「企画」を探す
- 市民の「ライフスタイル」を考えるため、これまでとは違う「使い方」「過ごし方」「働き方」を探す
- 活動の「場」はあるため、新しい取組みにチャレンジするような、持続可能な「仕掛け」や「装置」が必要である。

水辺利活用社会実験の 1 つとして、地域住民による観光案内に向けた実験を設け、「地域の記憶」を掘り起し、「地域の魅力」として発信する、回遊プログラム(まちあるきツアー)を実施することとした。

4. 回遊プログラム「へえほおまちあるき」の試行と展開

(1)回遊プログラム試行のねらい

今回の取組みは、単に歴史の伝達・継承、地域の魅力発信を行うのみならず、①油津のまちが作ってきた「まちの記憶・記録の継承」とする、②取り組む中で世代間交流を生み出し、コミュニティを醸成させる、③地域への愛着など結果的に地域活性化の取組みとなる、の 3 点をねらいとした。また中心市街地活性化の取組みの一環として、観光客等を油津地域に呼び込むため、地域の魅力を発信する新たな推進体制を必要とした。

そこで、当該まち歩き企画の目的を、「油津地区の住民が誰でもまち案内できる「気持ち」と「技術」をもつ」ことであり、将来的には油津地区住民による「観光

ガイド」へと展開することを企図した。企画は日南市地域振興課から油津地域協議会に実施を申し入れ、油津地域協議会主催の回遊プログラムとすることとした。

(2)プログラム作り

回遊プログラムは日南市地域振興課が基本的な枠組みを提案し、それに基づき、具体的なプログラム作りやルート設定はワークショップ形式で油津地域協議会有志(以下、運営参加者)が行った。ワークショップのコーディネーターは著者の1人である谷越が担当した。

当初参集した運営参加者は、これまでの油津地域での市民活動に積極的に関わってきたメンバーも多く、新たな人材の参画には工夫を要した。また「観光ガイドは知識を要するため敷居が高い」との不安や、「これまでも同様の取組みを行ったが継続できなかった」、といった声も聴こえた。そこでプログラムへの参画の敷居を下げ、出来る限り多くの住民に取組みに参加してもらうため、著者らから運営参加者に対し、「へえほおまちあるき」と銘打ったプログラム形態について提案、当該形態

にて実施することとなった(図-1)。当該プログラム形態では運営参加者を、「まちあるき客」を連れてまちを歩く「案内人」と、玄関先等で自らの経験などを語る「請負人」に役割分担し、個人個人の得意分野や関われる程度に応じて、プログラムに参加してもらった。

ワークショップは平成 2014 年 10 月 8 日を皮切りに計 4 回実施(うち 1 回は現地でのルート確認)、プログラム作りやルート設定を行った(図-2)。プログラムは 2 種類作り、2014 年 11 月 16 日(日)、11 月 24 日(月)の 2 回実施した(図-2)。特に 11 月 16 日のプログラムは、堀川運河を起点として堀川橋を題材としてアーチ部分の模型組み立てからプログラムをスタートする(石橋を積んで渡ろう)など、土木遺産を導入として町を紐解く内容にて実施した。「まちあるき客」の募集は日南市広報などを使って一般市民に呼びかけた。募集定員は各回 10 名程度とした。また「まちあるき客」からは参加費 500 円を徴収した。

(3)回遊プログラムの実施結果

回遊プログラムは予定通り 2 回実施し、11 月 16 日には 9 名、11 月 24 日には 7 名の「まちあるき客」の参加があった。50 歳代以上の参加が大半であったものの、

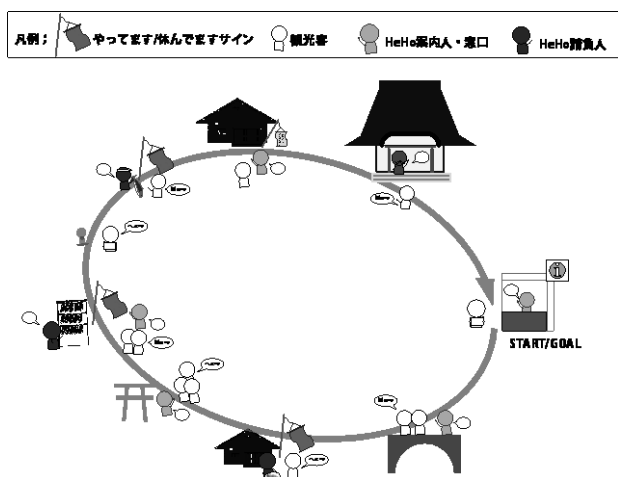


図-1 「へえほおまちあるき」概念図



写真-2 「へえほおまちあるき」の様子

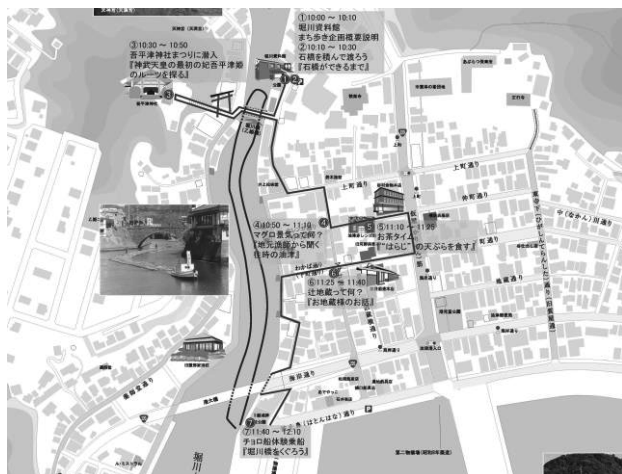


図-2 回遊プログラムルート設定



写真-3 「へえほおまちあるき」の様子

11月16日のプログラムには幼い子供連れ家族の参加もあった(写真-2、3)。一方、運営参加者は、これまで市民活動に参加したことのない住民が「請負人」として参加するなど、参加者はのべ24名におよんだ。

「まちあるき客」から回収したアンケート結果(16日；6名、24日；6名から回収)も、「まちあるき客」全員から「とても良かった(16日；3名、24日；6名)」または「まあまあ良かった(16日；3名、24日；無し)」との回答であり、評価は高かった。企画内容については、自由記述欄では、漁師や住職から直接話が聴けた点や、模型を用いた石橋の構造の解説が、特に好評であった。

(4)回遊プログラム実施の効果

2回の回遊プログラム実施後、2015年1月6日(火)には、運営参加者および日南市地域振興課ほかのメンバーにて、反省会を実施した。運営参加者はみな、実施の手ごたえを感じており、次回の実施プログラムづくりに向けた意欲的な意見が大多数を占めた。さらに引き続き油津地域協議会主体で本格的にこの回遊プログラムを実施することを、運営参加者の総意として確認するとともに、後日、油津地域協議会役員会や地域活性化部会にて平成27年度事業として取り組むことが合意された(正式な事業計画の承認は5月の総会まで保留)。

また継続的に「請負人」の発掘を行う姿勢もうかがえる。反省会当日は、弁甲節の唄と踊りが披露されるなど、運営参加者により既に新たなプログラム作りが始まっていた(写真-4)。反省会の後、2015年3月24日(火)には運営参加者を中心として、新たな人材の参加や「ネタ」を持ち寄った情報交換会が行われるなど、地域住民主体の積極的な取り組みの萌芽が見て取れる。さらに情報交換会では、地域の子どもの参加など、当該取り組みを地域づくりの新たな展開へと拡張させたい、といった意欲的な意見も挙がっている。

今回の取り組みを契機として、回遊プログラムが人材や活動等が地域にストックしていく仕組みへと発展していくことが、大いに期待できる。



写真 - 4 反省会で披露された弁甲節の踊り

5. おわりに (取り組みの成果と課題)

今回のような取り組みに関わる主体は、①ゲスト(まちあるき客)、②事務局(主催者；油津地域協議会・日南市地域振興課)、③キャスト(出演者；油津地区住民)であり、③キャスト(出演者)を活かす・巻き込むための④プログラム(企画；へえほおまちあるき、案内人と請負人の連携)も重要であった(図-3)。①ゲストが取り組みに参加できるよう、取り組み企画側(②事務局、③キャスト、④プログラム)は情報発信を充実させる必要がある。

今回の回遊プログラムの取り組みの成果は、②事務局と③キャストをつなぐ出演者募集において市民参画の意識確認ができたこと、②事務局と④プログラムをつなぐ企画検討においてコンテンツの有効性が確認できたこと、の2点が挙げられる。

一方、②事務局においては、企画力・ネットワーク不足や単発的なイベント型の体制など推進体制に課題があった。今後の取り組みでは、②事務局の推進体制強化が特に重要といえるが、行政の諸事情で取り組みが停滞・退化することが無いよう、市民育成・市民の活動力の強化が必要である。そのためには、取り組み(人材や活動)が、地域住民らで共有されストックされる仕組みへと発展できるよう、市民の活動を支援することが、行政の当面の役割であるといえる。

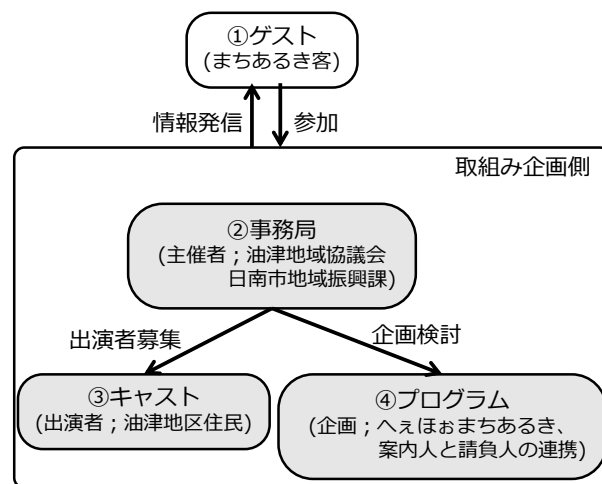


図 - 3 今回の取り組みに関わる主体の関係図

謝辞：当取り組みにあたり、油津地域協議会細田会長をはじめ協議会員の皆様にはご理解・ご協力を賜りました。心より御礼申し上げます。

(2015.4.6 受付)